

# 教 仏 名 聞

第27号  
(発行日)

2012年12月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 真宗門徒の善行為

N 「だれでもできる一番善いことは何をするのでしょ

N 「それが、阿弥陀仏にありと他に対して心が開かれ始めるということはどうい

がありません。仏陀や大菩薩は一切衆生へ慈悲心が開かれ

D 「南無阿弥陀仏は阿弥陀仏そのものです。ですから南無阿弥陀仏を与えることは人々に阿弥陀仏を与えることにな

D 「お念仏を申し、お念仏を聞くことですか」

D 「阿弥陀仏の大悲の心が自分の心に入ってきています。と、心が満たされてきます。そうすると、今まで自分が幸せになることばかり、いわば自分の方に向いていた心が、

N 「南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を聞いていく道は利他という善なる行いへと繋がっているのですね」

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

D 「南無阿弥陀仏は阿弥陀仏そのものです。ですから南無阿弥陀仏を与えることは人々に阿弥陀仏を与えることにな

N 「ということはそれまでは心は他者に開かれていないということですか」

N 「仏さまのみ心にふれると、自分の人生に満足がいく。そうすると自己中心的な生き方から解放され始めていくということですね」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「ということはそれまでは心は他者に開かれていないということですか」

N 「仏さまのみ心にふれると、自分の人生に満足がいく。そうすると自己中心的な生き方から解放され始めていくということですね」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

N 「お念仏を申し、南無阿弥陀仏を聞くと阿弥陀仏にあり道がつかます。阿弥陀仏にありと初めて人生に満足が与えられ、満足が与えられると他の人々に心が開かれ始めます」

D 「他者の幸せ、他の人たちの平安に関心が向き、人々の幸せに寄与したいと自ずから心が、少しづつですが他者に開かれていくことですか」

D 「ええそうですね。お念仏を申し、お念仏を聞くことは善い行いであるという意味をさらに申しますと、お念仏を申し続けるとそれは周りの人々に自然に南無阿弥陀仏を与えていくことになることになっていくのです。親鸞聖人は南無阿弥陀仏となうるはすなわち安楽浄土に往生せんとおもうになるなり。また一切衆生にこの功德をあたうるに

N 「お念仏を申し、それを聞き続けていることは一番善い行いであることは分かりました。では、(次ぎに善いこと)とはどんなことでしょうか」

に関わって改善する活動、あ

るいは社会正義を求めての活動に参加することなどです

ね」  
D 「こういう社会的な活動は現代はことに期待されていません。こう言っている私自身ははずかしながらなかなかそういう活動はできないのです

が」  
N 「先頭に立って積極的に社会正義の活動ができる人もあれば、そういう活動に人の後からついて行く人、あるいは活動には参加しない人やできない人もありますね」

D 「それは、それぞれの人の宿業とか外からのいろんな縁によって、人の行動はさまざまです」

N 「宿業によってというのは」  
D 「人にはその人固有の感性や人間性、性格や性質などの違いがあるのですね。ですから同じような行動をするというわけにはいきません」

N 「外からの縁とは」  
D 「自分の生計にゆとりがあるとかないとか、家族や勤め先の状況などの縁もありましよう。たとえば家族に介護をしなければならぬ人がいると自由に行動することは困難

になりましよう」

N 「ほかには」

D 「その時代や受けてきた教育や周りの状況の縁によって、人は動かされるものですね。例えば今度の原発への反対も、原発の事故が関東地方や東北地方の人のように身近に起きた場合と、関西の私たちがのようにやや遠いところに住んでいる人では、原発に対する受けとめ方が微妙に違うように思います。直接に被害やリスクを受けたり感じたりしている人と、そうでない人では問題に対する対応の濃淡があり得ます。沖繩（戦争）とか広島（原爆）とか水俣（水俣病）などでの苦しみを経験した人とそうでない人の意識に温度差があるように」

N 「宿業や諸縁によって、社会の諸問題にたいして、積極的に活動することは皆が皆できないですが、だれでも可能な善き行いがあるとするればどういう行いでしょうか」

D 「それは日常の善行為ですね。一人一人の生活現場です。このことについては、日本人でタイ仏教に帰依したプラユキ・ナラテボー師が

（ブツダは一人ひとりの状態を把握して、臨機応変にその時々が一番ふさわしい方便を与えたといわれます。ですから、飢えて大変な人が目の前にいたら食事を与えればいいだろうし、相手が話を聞いてもらいたがっていれば、話を聞いてあげればいい。人のニーズも千差万別ですし、場合に

に応じていろんな方法もある。その場その場で、自分が今ここでできることをしていけばいいのではないかと思えます」と言っています」

N 「人それぞれのその場その場で、自分が今ここでできる善いこととえ小さな善であっても善いこととえいくという

とです」  
D 「ええそうです。こういう善ならだれでも可能ですね。それぞれの所で善い縁があれば、その縁を生かしていくこととです」

N 「身近な人への小さな親切とか、協力とか、寄り添うなどの縁がくれば、それに応じていくことなのです」

D 「ええそうです」  
N 「ところで、真宗では、自分が励んで行い善は自力の善ではないのですか」

D 「へ自分が励んで行い善は自力の善」というのは大きな誤解です。善に励むこと、そのことは自力でも他力でもありません。ただ（自分の励む善でもって浄土に生まれようとする、あるいは自分が救われようとする）のは自力の計らいである

と否定されています。それは自らの救いの為に自らの能力に依存して行おうとする善であって、憍慢心と功利心が根になっています」

N 「自分が救われるために行い自力の善は阿弥陀仏をたのみ、憍慢と功利心が根になっ

てい

るのですね」  
D 「ええそうです。そういう往生浄土の道において（自力）が問題になるのであって、ただ善だからそれをしたと思

って為す善はいくらしてもよく、大いに望ましいことです」  
N 「善であるから行い善は小さい善であっても大いに勧められるべきものなのです」

D 「ええそうです。そういうことで、真宗人の生き方はどういう生き方が望ましいかという

《住職雑感》 西田幾多郎博士は「迷と云うことは、我々が対象化された自己を自己と考えるから起るのである。迷いの根源は、自己の対象論的見方に由るのである」と云う。すなわち（これが私だ）と考えたり、イメージしたりしているような私（対象化された自己）は真実の自己ではないと云う。私たちはさしあたり、身体を漠然と（私）と考えたり、あるいは人と比べている（私）とか、判断したり、選択したりしている自我を（私）として捉えている、しかしこうした私

は真実の自己ではないと云う。あるいは脳科学者のいうように、（意識（心）は脳から生まれたもの、あるいは脳的作用であるから、脳髄こそ自己である）というような自己は、典型的な対象化された自己である。だから、当然真実の自己ではない。にもかかわらず「心の働きは脳的作用であり、脳こそ心であり自己である。それゆえ脳死は自己の全体的死であるから、死んだら一切無に帰す」との説がまかり通っているのが現代である。

清沢満之師は「天道を知るの心を知るの心、これ自己なり」と云われたが、対象化されない、むしろ対象化しつつある主体の側こそ真実の自己であると云えるのではないか。この真実の自己は対象化できないから、坐禅などで直観的に悟るか、真実の自己が南無阿彌陀仏となって喚びかける名号を（聞く）しかあえないとも言えよう。

# 正信偈に学ぶ問答

(四十八)

一生造悪値弘誓  
至安養界証妙果

(書き下し) 一生悪を造れども、弘誓に値いぬれば、安養界に至りて妙果を証せしむと、いえり。

(現代語訳) 「たとえ生涯悪をつくり続けても、阿弥陀仏の本願を信じれば、浄土に往生しこの上ないさとりを開く」と述べられた。

\*

N 「この部分も道綽禪師のお心を聖人が讚歎された一節ですが、一生悪を造るような者も阿弥陀仏の本願を信ずれば阿弥陀仏のお力によって浄土に至って悟りを開くことができるということですね」

D 「ええそうです」

N 「ところでここで言われているような(たとえ一生悪を造り続ける)というようなことをなぜ仰せられるのでしょうか」

D 「阿弥陀仏の御本願はたとえ一生悪を造り続けるような

者をも救うという廣大無辺な大悲心であるということを表されるのでありましょう」

N 「また、人が一生悪を造る、あるいは悪を造り続けるというようなことが果たしてあるのでしょうか」

D 「仏・菩薩がなされるような純粋な善(無漏の善)に比べ、私たちの善は自我心のひつついた汚れた善しか為し得ず、私たちの行う善悪の全体は汚れているという限りでは、生涯純粋な善は一つもなし得ず、悪ばかり為しているとも言えます。それゆえ私たちはへ一生、悪を為してやまぬ者よ」と仏さまに指摘されてもイヤとは言えないのでしよう。そのお心から一生造悪の凡夫とは私のことであると知らされるのです」

N 「なぜ自我心で行う善は汚れがついているのですか」

D 「自我心は何かにつけ(自分にとつての利益を得ようと計らう心)でもあります。ですから自我心があると、善を

行う動機の中に、それによつて利得を得たいという心が潜んでいます。善いことをして人に善く思われたいとか、人に親切をすればいつかは自分も助けてもらえるとか、善いことをすることで自分は(善い人間なのだ)と自認したいとか、今善いことをすれば将来良い結果が報われるとか、善いことをして神様の救いにあずかりたいとか、善いことをして自分を高みに挙げたいとか、善いことをして来世に善き処に生まれたいなどなど、自分の善根でもつて(何らかの利得や功德)を得ようと計らう、そういう計らいの心が伴った善は自我心の伴った善です」

N 「そういう自我的な善、相対的な善は、純粋な絶対の善の鏡に照らされると、汚い行為すなわち悪と知らされるのですね」

D 「ええそうです」

N 「では自我的な善はしてはいけないのですか」

D 「自我的な善しかなかなか私たちはできません。ただ、悪をなすよりは自我的な善であつてもそれを為していく方がいいのでありましょう。ですから、たとえ善をなしても

「自分はお粗末なことしかできなくて済みません」と謝りつつ為していくことでありましょう。自分は善を行つていと誇るの浅ましいことです」

N 「すると、この正信偈の一生造悪の者とは私のことだといただけがいいのですね」

D 「ええそうです」

N 「では(弘誓に値いぬれば)というのは」

D 「弘誓とは一切衆生を救おうとする広大な念仏往生の誓いのことです。お念仏を申し、念仏往生の誓いを信ずれば安養界に至ると仰せられるのです。ここを和讃で聖人は

縦令一生造悪の衆生引接のためにとて称我名字と願じつつ若不生者とちかいたり

と仰せられています。念仏往生の願とは(我が名字を称えよ、必ず浄土に生まれさせる)との誓いです。それは誰のためかという、最も罪の重い者に焦点を当てて、万人を救わんとせられる弥陀の本願です。一生涯悪を造つてやまぬ愚かな者に、(汝、我が名を称えよ)と私たちの全分ありだけを引き受けて救わんとしたもう大悲のお心がここに表されているのです」

N 「実に有難い仰せですね」

D 「ええ、広大な大悲心です。浄土は安養界であり、浄土に至れば妙果を証すで、この誓いを受け入れる人は浄土に至り仏(妙果)になして下さるのです」 (了)

## 《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(土)

午後二時始

ご講師 大谷大学名誉教授(仏教学)

三桐 慈海 先生

\*なお、同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

# 木村無相さんの法信了

(昭和五十七年六月十一日付けの木村無相さんから私へのお手紙。前月号からの続き)

私は今、念佛詩「歎異抄」を書いていきます。その「歎異抄序」については

唯円御房 歎異抄序に

”ひそかに愚案をめぐらせてほぼ古今(ここん)かんがうるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑あることを思うに”

ああ

”有縁の知識” 親鸞聖人

”口伝の真信” ただ念佛

”易行の一門” 念仏往生

親鸞聖人ご和讃に

”念佛成仏これ真宗”

ああ

”口伝の真信” ただ念仏

相続すべきは ただ念仏

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

としました。

『歎異抄』が私のための『歎異抄』であるといいただき、『歎異抄』を貫くものは

”ただ念仏”

有縁の知識は親鸞聖人

易行の一門は 念仏往生の唯一門

聖人の

念仏往生これ真宗

といただいでいることです。

さて、又話が飛びますが『二河譬』に「白道」について

中間に一つの白道を見る。きわめてこれ狭(きょう)少(しょう)なり

とあり、聖人かドナタか

その巾(はば)、四・五寸

とありますが、それは「白道」にさしかかる前を見ると、巾四・五寸に見えて至つて狭く、心細く思えることですがさて、「必ず渡るべし」と実際に踏み込んで往(ゆ)くにつれ、僅(わずか)か四・五寸で狭いと思つていた白道がだんだん広く感じられ、

大道長安に至る

という「大道」に感じられるようになるので、はじめに「狭(きょう)少(しょう)、四・五寸」としか思えず、どうも信用できなくても、この道よりホカなしと仰(おほ)せのままに踏(ふ)み込んで渡り出すと、だんだん白道の中は、大道も大道どんなものでも通ず。十方衆生(じゆうじやうじゆう)一時に、全部通れるほど、広い「白道」

「ただ念佛の世界」「如来の本願海」ということがだんだんわかってくるのですよ。

このごろ新聞に「硫黄島」その他で、奥も長く奥が広い、大防空壕(ほうくうこう)が見つつかつ

ていますが、いづれもその入口は狭くやつと一人がはいつくばつて入れる位——それが中に入って奥へ行くほど広い広い——。

それと同じことで「白道」は一見、四・五寸に見えて踏み込むほど、実に広い大道——。

入口のところ「この入口はとても狭く小さいなあ、これに入れるものだろうか」と思うと同じで、三定死(じやうじゆう)においては白道、四・五寸にしか思えぬほど。踏みこんでゆくにつれて深い、広い——。

信じなくてはいけない、これではと、ダメ人間の自分の信にこだわっている間は、わからないが、サダ女曰く

『私はどうも信じられません。ウタガイはれません。聞こえません。どうしましように——』

機(は)の状態にこだわっている間は「白道」は狭くしか感じられないが、事実はそのでない。

凡夫(ぼんぷ)のアタマで考えることにとらわれている間は、凡夫(ぼんぷ)のアタマにたよつていない。信(しん)じられないのですが、そのサダ女(さだめ)に対して、香樹院師(かうじゆいんし)が

そのままだ称(な)えるばかりでお助け

そのホカ(ほか)にナニモイラヌぞ

とおさとし下さっている。凡夫(ぼんぷ)の不信(ふしん)やウタガイ(うたがい)など、富士(ふじ)の山(やま)ほどあつても、ソレ(それ)は小さい小さいモノ。

ただ念佛(ねんぶつ)の白道(はくどう)は実に広くて豊(とよ)か。凡夫(ぼんぷ)の不信(ふしん)ウタガイ(うたがい)など、問題(もんだい)にならぬ。信(しん)もだ。

それゆえ、「そのまんま」という。信じられません 聞こえません

でも、「そのままだ、称(な)えるだけ」である。よき人(よきひと)のおおせのままに

ただ称(な)えること

ただ念佛(ねんぶつ)

このホカ(ほか)はないのです。

『求法用心集』に、たびたび書くが、

二。立てぬまま

曰(いは)く

道(みち)は見えている。

イザリ(いざり)が立(た)とうとする。

立てぬ、どうしても立てぬ、

立(た)とうと思(おも)うのもマチガイ。

立(た)てると思(おも)うのもマチガイ。

そのままだである。

とある。

「三定死(じやうじゆう)」であろうが、なかるうが、いつでも「そのままだ」である。

「ナムアマミダブツ」とは

「そのままだ」ということ、

「ナムアマミダブツ」とは

お前(まへ)がどうあるうとも、

お前の生死(しんじ)出離(しゅり)の一切(いっけつ)は

マルマル引き受(う)ける

との仰(おほ)せ。

どうにもならぬまま、ナムアマミダブツとお引き受け(う)けただくホカ(ほか)はない。

池山(いけやま)先生の仰(おほ)せに、

ナムアマミダブツ ナムアマミダブツ

これだけだよ

これだけだよ

これだけしかないのでよ

これだけでいいんだよ

と、実にカンタン。今(いま)から称(な)えるのでなくて、スデにナムアマミダブツと称(な)えている。そのまま、このままのホカ(ほか)ナニモ無い。 (了)